



## 画ニメ『ざくろ屋敷』発売に寄せて ——鹿島茂

1999年のバルザック生誕200年を記念して、私自身が責任編集を引き受けた『バルザック「人間喜劇」セレクション』(全12巻・別巻2)が藤原書店から刊行され、主要な作品が読みやすい訳文で流布するようになったが、編集者から漏れ聞いたところでは、意外に若い読者が付いているという、うれしいではないか。これぞ私の狙ったところである。バルザックは野心とガツをもった青年にこそ読まれしかるべき作家なのである。

しかし、そんな私でも、若き深田晃司監督から『人間喜劇』の中の短編、それも『ざくろ屋敷』を画ニメ化したいという話を聞かされたときには、正直言って驚いた。というのも、『ざくろ屋敷』というのは、

ストーリーらしいストーリーのない、いたって地味な短編だからである。だが、事務所に作画担当の深澤研さんとともに現れた深田監督はこの作品にインスピライアされた経緯を情熱的に語り、風俗の細部について熱心に質問を繰り返した。初めは懐疑的だった私も、しまいにはできる限り協力することを約束した。

で、その結果はというと、素晴らしい一語に尽きる。よくぞ、ここまでバルザックの世界を、それも20代半ばの日本人青年が映像化したと感嘆せざるをえない。とくわけ、フランスでも最も美しい一帯と呼ばれるロワール川沿いの緑とざくろ屋敷の色の対比が見事である。おかげで、それまで漠とした

印象でしかなかった『ざくろ屋敷』という短編が初めて鮮明な映像となって現れてきたといついい。これなら、『ざくろ屋敷』を入口にしてバルザックの世界に入っていく感じの人も多いかもしれない。そこで、まず『ざくろ屋敷』の筋を語り、次に『人間喜劇』の全体を解説しておこう。

『ざくろ屋敷』の物語は至って単純である。王政復古のある年の春、ロワール河岸にある美しい屋敷に13歳のルイと8歳のマリーの兄弟をつれた上品な婦人が引っ越してくる。ブランドン夫人、兄弟は母を熱愛していたが、母の健康は優れず、一日と衰えてゆく。11月のある晩、母はブランドン伯爵宛ての手紙で自分の死を告げ、彼を許すと口述させたのち、数日後に子供たちに見守られて息を引き取った。ルイは弟をトゥールーズの寄宿学校に託し、自分はロシュフォールの港で見習い水夫となつて船出した。

2人の兄弟のその後の運命を知りたいと思う読者は『二人の若妻の手記』を読まれることをお勧めしたい。そこにはマリー・ガストンが寄宿学校を出た後、文学で名をなそうとするち、年上の末亡人ルイーズ・ド・マキュメールと結婚した経緯が語られている。

また、ブランドン夫人とかつての恋人らしいフレンケルシニ伯爵の前に興味を持った読者は『ペール・ゴリオ(ゴリオ爺さん)』をひもといてみるとよい。主人公のラスティニャックが訪れるボーセアン

夫人の舞踏会で、ブランドン夫人がレディ・ブランドンという名前でパリ社交界最高のエレガントな女性として登場してくるだろう。

このように、バルザックの小説というのは、ある作品で端役だった人物が別の作品では主役を演じたり、あるいは逆に主役だった人物が脇役として登場したりする。バルザックはこの人物再登場法を駆使して、自分がそれまでに書いた作品とこれから書く作品を結び付け、現実の社会と抗争するほどのヴァーチャルな世界を築き上げようとした。この巨大な作品群が「人間喜劇」という総題で呼ばれているのである。

フランス人でさえ不可能な、完璧な考證で画ニメ化された『ざくろ屋敷』に、ここは一言、「脱帽(シャバード)」とだけ言っておこう。

日本の若い世代の才能はこの画ニメ・シリーズで大きく開花するにちがいない。

